

慈照寺観音殿（銀閣）雑考

名誉顧問・京都大学名誉教授 川上 貢

はじめに

足利義政が晩年に造立した東山殿は、義政の死後にその菩提を弔うため寺院にあらため慈照寺と号した。慈照寺に現存する東山殿の遺構は二重の殿閣観音殿・銀閣と持仏堂東求堂のみである。

観音殿は義政が亡くなる前年の長享三年（1488）二月に立柱上棟して、同じ年の八月の予定では年末または正月頃に造り終わるとみられていた。それから間もない翌年の正月に義政が亡くなっているため、観音殿はほぼ完成あるいは完成に近い状態にあったものとみられる。

観音殿は今日では俗称の銀閣の方がよく知られている。観音殿が造立された当初にはまだ銀閣とは呼ばれていない。銀閣の呼称が使われるようになったのは何時からか、また、どのような理由によるのか、ここにあらためて検討してみよう。



挿図 慈照寺観音殿（銀閣）

1 京都名所案内記と銀閣

江戸時代に京都の地誌や名所案内記が多く刊行されている。どの書にも慈照寺は名所の一として紹介されていて、俗称の銀閣寺が広く使用されている。また、境内に所在する観音殿は閣またはを銀閣が通称になっていた。

万治元年（1658）に刊行されている『洛陽名所集』は、類書のなかでも比較的早く刊行されており、慈照寺について

「院の仮庭に閣あり、銀箔（箔か）にて彩しければ、銀閣寺とも云うなり、北山は金閣に、ことならふとぞ」

とある。

また、正徳元年（1711）印行の『山州名跡志』には、二重閣とあって

「先是義満公北山の山荘に金閣を造らる。是れに准じて此閣を建らる、然れども未鏤箔義政薨じ玉えり。雖非箔其の趣好に依て呼銀閣也。然るを実に銀箔ありと思ふは非なり。見者十百皆是れを見顕して不審をなさずと云ふ」

とみえる。

これらの案内はともに義政が東山殿に建てた観音殿は、祖父の義満が北山に建てた金閣に倣ったものと考えられている。金閣が金箔でその内外を飾っていることに倣って、観音殿では銀箔で飾るあるいは飾ろうとしたという。

『山州名跡志』の記事は、義政は箔で飾る工事に着手しないままに亡くなっているため、箔でかざるという趣好だけに止まり、実際は箔で飾っていると思うのは間違っているという。この主張は注目してよい。

その後の案内記には

「いたうふりぬれは銀閣は名のみにてすこしものこれる所なし」

（本居宣長『在京日記』、宝暦七年、（1757））

「しろかねのはくたみたる跡おちうせたと、はつかにのこれるも年月のほとおもひしらる」

（『思出草』、寛政五年、（1793））

とあって、銀箔の跡はすこしも残っていないのは永い年月が経過する過程で剥落したためであろうと解釈していて、銀箔による飾りが施されたということについては疑問を抱いていない。

2 金閣との関係

義満が晩年に北山殿を営み、その広大な境域に園池や殿舎が設けられていて、それらの一に舍利殿・金閣が含まれていた。それは三重の殿閣であり、その最上層に仏舎利をまつ

り、第二、三層の内外を金箔で装った金閣の姿態は一際目立ち、金閣とその近くにたつ二層の会所と互いに高さを競い合い、両者は空中廊下で結ばれていた。

北山殿の諸建物は義満の没後に分散移築され、その境域と残った施設で義満の菩提所鹿苑寺が創建された。舍利殿は北山殿の唯一の遺構であり、今日金閣として著名であるが、昭和25年7月に焼失し、同30年に再建された。

『蔭涼軒日録』の鹿苑寺の記事では、応仁の乱以前は舍利殿、三重殿閣と呼んでいたが、乱後の文明十六年（1484）十月十五日以降の記事には金閣の呼称が使用されていて、応仁の乱後に金閣の呼称が慣用されるようになったことが知られる。

3 足利将軍御所と観音殿

北山殿よりも早く洛中に造立された義満の室町殿は寢殿とその付属屋を主とする晴向き建物群、庭池の周辺に間配られた庭間建築群そして男女奉公衆の対屋、台所などの家政建物群からなる。このうちの庭間建物群は義満が厚く帰依した夢窓国師の西芳寺の建築と庭の構成をモデルに仰いでいて、会所、泉殿、持仏堂、観音殿、禅室、舟舎、山上亭からなる。北山殿は同じ構成をさらに規模を広げて営まれている。

また、義満の室町殿以降に造立された将軍御所である四代義持の三条坊門殿、六代義教の室町殿そして八代義政が義教の室町殿を移築して造立した烏丸殿、さらに烏丸殿を先の室町殿跡地へ戻して造立している義政の室町殿はいずれも義満の室町殿を典型にしてその規模と形式を踏襲している。

これらのいずれにも観音殿が存在し、義満の室町殿のものは勝音閣と命名されていた。その後の将軍御所の三条坊門殿そして義政の室町殿のそれぞれの観音閣はいずれも同じ勝音閣の名を踏襲している、しかし、金閣あるいは銀閣とは呼んでいない。

義政の東山殿は晩年の隠居住まいであるため、洛中の将軍御所のうちの晴れ向き群を省略し、庭間建物と家政建物の二群で構成されていた。そのうち庭間建物群のうちに観音殿があり、これまでの洛中の将軍邸諸例のなかの観音殿に准じたものであった。

『蔭涼軒日録』文明十九年六月五日の記事で、義政が鹿苑寺へ参詣したことを世間では「この参詣は東山に金閣を建てる為の下見であろうと噂している」と書き添えている。

この頃の東山殿は未だ会所や泉殿が建築中であつた。東山に金閣を建てる噂されたのは、この東山殿に建てる予定の観音殿と考えられ、二年後の長享三年二月に立柱上棟している。

義政にとって、応仁の乱前後に生活していた洛中御所の観音殿については二度の移築経験を通じてよく承知していた。しかし、東山殿の観音殿は新築であるだけに先例に准じな

がら色々な注文を出している。

上下二層の各額名は禅僧に命じ差出させてた案のなかから義政が選び決めている。下層は心空殿と名付け、西芳寺の坐禅床のある瑠璃殿に倣い、僧堂にあてる予定で、五山の僧堂の名を参考にしてしている。上層は潮音閣と名付けられ、禅宗様の仏堂につくり、観音像を本尊として安置していた。

在来の観音殿では、恒例の行事として毎月十八日に観音懺法が行なわれ、天龍と相国両寺から僧が隔月に交替奉仕していた。東山殿でも同様に観音懺法を勤めるよう決めている（『蔭涼軒日録』）。

4 金閣と観音殿・銀閣

江戸時代の京都で鹿苑寺の金閣や慈照寺の観音殿・銀閣に似た形式の殿閣は西本願寺の飛雲閣、東福寺開山塔常楽庵三仏閣があるが、金閣や銀閣は特に目だった名所であった。今日でも京都市内の観光名所として観光客が最も多く訪ねているのは二条城や清水寺とならんで金閣寺と銀閣寺があり四季を通じて観光客で賑わっている。

鹿苑寺の金閣は三層の殿閣で、下二層を和風の同じ大きさにつくり、その上の三層目に小振りの禅宗様の堂を積み重ねていて、上下のバランスが程よく保たれており、その二三層の内外を金箔で塗装されていた。

他方の観音殿・銀閣は二層の殿閣で、下層は池に面した東面を正面とし、書院造り形式の住宅風で、吹き放しの広縁や引違建具を立て、小間に間仕切られ、開放的で変化に富んでいた。

これに対する上層は禅宗様の仏堂につくられ、一室だけのホールで南を正面とし戸口と左右に火灯窓を配し、東西の両面に長連床をそなえ、柱間三間に各火灯窓を開け、背面は戸口のみとする。軒出の大きい宝形屋根をともなう上層の大きいボリュームに対して下層の軸部構造は開放的で軽く見える。

上下の層の建築様式を違えさらに正面の向きが相違するという違う形式表現の組合せによる新たな構成の美にこの殿閣建築の特色がみられる。

金閣と観音殿の関係は、地理的には京の町を中に介して金閣は西の北山にあり、他方の観音殿は東の東山にあり、両者は互いに向い合っており、造立者の義満と義政は祖父と孫の肉親であり、両者の対照性は極めて著しい。それは金と銀、太陽と月、陽と陰の関係になぞえられる。金のもつ輝く明るさに対して、銀は鈍い光と地味な渋みをもつように、金閣は金箔で覆われ明るく輝やいてみえ、他方の銀閣は黒い色調で全体が覆われ、枯れた風合いをもち渋く落ち着いて見える。このように金と銀の対比から金閣に対するものとして

銀閣に行き着くのは当然の成り行きであり、仏堂としての観音殿という在来の呼称よりも、銀閣の呼称の方が愛称として呼びやすく世間に広まった。

したがって、銀閣の呼称が先行して広まるなかで、史実に関係なく金閣の金箔の飾りに准じて銀閣は銀箔を貼る装飾が施されていたと推測されるようになった。

むすび

観音殿の国庫補助による修理が2007年から始まったが、そのための事前調査で修理箇所の確認と合わせて、建物部材が銀箔で飾られていたがどうか、痕跡の有無を確認するための調査が実施された¹⁾。

その調査の結果が昨年一月に寺当局から発表されている。そのときの新聞報道の記事²⁾によると、風雨による痛みのすくない屋根軒裏の部材や花灯窓枠などから採取した資料を科学分析の手法で検査したが、一部に黒漆で塗装した痕跡を残す他は銀の成分は検出されなかったという。つまり、観音殿を銀箔で飾っていたという見方は成立しないことが明らかになった。

このような科学的分析によるまでもなく、関係文献資料を検討したところでは、観音殿を銀箔で飾る装飾仕事を実施された事実はないと判断できる。しかし、その事実はなくとも、金閣と対比することで、観音殿から受けとる印象が地味で渋いところから、銀に準え銀閣という呼称が生まれ、観音殿と呼ぶよりも親しみをもって広がり、俗称として定着するにいたる。そして銀箔による飾りが、実際に施工されたかどうかに関係なく、種々話題の的になり評判を生んで銀閣の名を高めるにいたったと考えられる。

(註)

1) 財団法人建築研究協会「国宝慈照寺銀閣（観音殿）現況調査報告書」平成18年10月。

2) 京都新聞、平成19年1月5日付夕刊。